

ダウン症児に対するズボン着衣の指導

— 刺激フェイディング手続きを用いて —

Wearing pants training for child with down syndrome

小幡知史

Satoshi Obata

NPO 法人だいち

Specified non-profit Corporation Daichi

Key words: 日常生活スキル, 刺激フェイディング, 刺激プロンプト

目的

適切に更衣できることは、障害のある児童の日常生活活動（以下、ADL）に大きく関わるスキルの一つである。しかし、衣服の着脱はできても、衣服の前後を正しく着ることが困難な事例が数多く報告されている。本研究では、ダウン症を伴う児童のズボン着衣行動に対して、刺激フェイディング手続きを用いて、ズボンの前後を正しく着る行動を指導し、その効果を検証した。

方法

対象者

ダウン症を伴う 16 歳の男児。ADL はほぼ自立しているが、衣服を着る際、よく前後を逆に着てしまうことがあった。

場面

放課後等デイサービスの通所中に、指導を実施した。指導は 1 日 1 セッション行われた。また、1 セッションは平均 10 試行であった。

標的行動

ズボンの前後を正しく履く行動を標的行動とし、その生起回数を従属変数とした。

独立変数

ズボンの前部に付けた刺激プロンプトを用いて、その刺激プロンプトを段階的に取り除いていく刺激フェイディング手続きを独立変数とした。

刺激

刺激は赤い丸枠に囲われ、中央には児童の名前が記載されていた。また、刺激の大きさは横 20cm、縦 28cm で、ラミネート加工された。

実験計画法

ベースライン条件と介入条件からなる AB デザイン法を用いた。

観察方法

指導場面を録画したビデオ記録をもとに、標的行動の正反応を記録した。

手続き

ベースライン条件では、対象者にズボンを履くように

促した。対象者がズボンの前後を正しく履くことができた場合には賞賛をし、間違っただけの場合にはフィードバックを一切行わなかった。上記の流れを 1 試行とし、3 セッション実施した。その後、介入条件に移行した。介入条件では、ズボンの前部に刺激を付けた。また介入条件のはじめに、事前訓練を実施した。事前訓練では、対象者にズボンを履くように促し、ズボンの前後を正しく履けた場合には賞賛を行い、間違っていた場合には刺激を指差しながら「逆だよ」とフィードバックした。対象者が 3 試行連続でズボンを正しく履くことができたなら、本試行を実施した。本試行では、刺激を着いている点以外は、ベースライン条件と同じであった。

結果

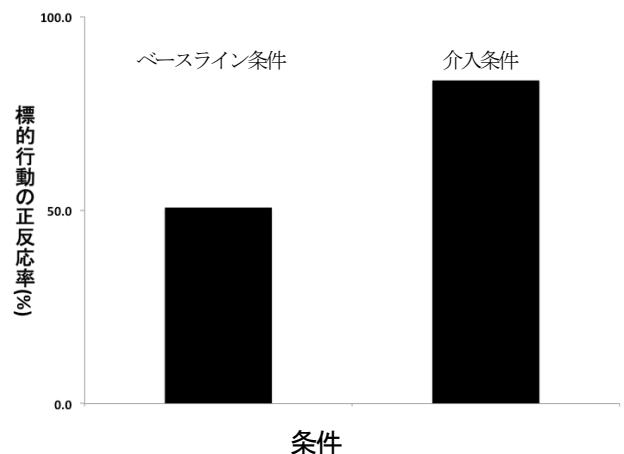


図1 標的行動の正反応率 (%)

ベースライン条件では、標的行動の正反応率は約 50% だった。しかし、介入条件に移行すると、正反応率は約 80% まで増加した。

本研究は継続中である。今後は、段階的に刺激プロンプトを取り除いていくことで、わずかなプロンプトでズボンを前後正しく着られるように指導していく。

参考文献

ミルテンバーガー R. G. 園山繁樹・野呂文行・渡部国隆・大石幸二 (訳) (2006). 『行動変容法入門』 二瓶社